



中高生とともに差別と闘う

「まさかミナミが…」

吉成タダシ



ユウキの言葉に反応して、ミナミがその日の授業の感想を、こんなふうに書いてきました。

「私は初め、ルールは嫌な気持ちになる人がいなくなるようにあるものだと思っていました。今もその気持ちに変わりはありません。でも資料にある主人公のように、注意をせず、近所づきあいの方にばかり気を遣ってしまうのは、少し違うかなとも思いました。まだ答えは見つけられていません。でもやっぱり思うのは、この日本の平和は、人の心くばりやつながりで守られているんだなという事です」

当初予測していた「ルールを守る」という概念は、ユウキの発言でもむきを変えてしまいました。規律が乱れるからルールを守る、罰があるからルールを守るというルールありきではなく、その前に人と人としてのつながりが不可欠なものです。押しつけや人を縛るのではなく、緩やかな人と人とのつながりが根底にあつてこそルールだということです。

こんな子どもたちの姿や発想が、人権学習に取り組んできた結果なら、こんなに嬉しいことはありません。子どもが仲間によって変わりゆく場面、思考がグンと一段高まっていく瞬間、羽化した蝶の羽根が鮮やかに彩られていく様を、これだけ間近なところで見つめることのできる幸せは、教師としての特権なのかなと思いました。

まさかミナミが…

「ラスト道徳」の流れは、そっくりそのまま二週間後の卒業式に引き継がれていきました。卒業生40人、一人ひとりが発表する「別れの言葉」の一人目に、私は前述のミナミを指名しました。舞台は卒業式ですから、涙涙に明け暮れてしまうと、いくら時間があっても足りなくなってしまう。でも、いつも学級委員を務め、合唱部でも部長を任されていたしっかり者のミナミなら、無難に一人目を務めてくれる。そう踏んでいたのですが…

「先生方へ。受験勉強などで分らないところがあり、質問したらいつもいてねいに指導してくださりありがとうございました。また、テストの点数が悪かった時にも励ましたりアドバイスをしていただきありがとうございました。短い間でしたが本当にお世話になりました。先生方のことは一生忘れません。」

合唱部の後輩たちへ。アンサンブルコンテストグランプリおめでとう。昨年度は失格という結果に終わり、悔しい思いをしたね。だから私も自分のことのように嬉しかったよ。夏のコンクールは大変だと思います。でも、今のみんななら絶対大丈夫だから自信を持って歌ってね。いつも厳しくしてしまっただけ、今までついてきてくれて本当にありがとう。いつかみんなと歌える日を楽しみにしています。頑張ってください！」

私の予想はまったくの逆はずれでした。冒頭、ミナミから言葉が出てこないのです。号泣して、一言目が

出てこないのです。

「まさかミナミが！」

私と同じ思いだった同級生や先生方もいたはず。共に時間を過ごした先輩から直接語りかけられた合唱部の後輩たちには、宝石が散りばめられたようなメッセージになったのではないかと思います。こうして式場は、一人目から涙涙の空気に包まれていきました。

お父さんとおばちゃんへ

ユウキの番がやってきました。

「野球部のみんなへ。キャプテンとして全然できてなかったと思うけど、こんな僕にずっとついてきてくれて、本当にありがとう。」

ダイスケ（在校生）へ。県大会の時に準優勝できたのは、連投になってダイスケが投げてくれたからだ。僕は思っています。本当にありがとう。これからも頑張ってください。野球部のみんなも、これからまだまだ大きい大会とか残っていると思うので、頑張ってください。

お父さんとおばちゃんへ。今まで迷惑しかけてこなかったと思うんですけど、嫌いになったときもあつたけど、ここまで成長できたのは本当にお父さんとおばちゃんのおかげだと思っています。まだまだ成長しきれない部分もあると思うので、これからもよろしくお願いします。

三Aのみんなと先生へ。三年間と九年間、毎日楽しく過ごせたのは、みんなのおかげだと思っています。中学校入ってから、先生とずっと

いて、とても大事な宝物がたくさんできました。休み時間とかふざけて笑ったりするのもうできないと思うと、とても寂しいです。今まで本当にありがとうございました」

中学三年生男子、野球部キャプテン。浅黒くがっしりした大柄な体格のユウキが、人目をはばかることなく、涙をこぼし、言葉を詰まらせながら立派に言葉をつないでいきます。今度はすべての野球部員が神妙な面持ちで、一言も聞き漏らすまいと、ユウキを見つめていました。

「何を考えているか分からない子」

「瞳の奥に暗い闇を抱えている子」

小学校からの引き継ぎで聞かされていたユウキの特徴でした。それは三年間の時を経て、まったく違ったものとなっていきました。

いつか、地区のお祭りの模擬店で、ユウキのお父さんと隣り合って焼きそばを焼いたことがありました。口数の少ない強面のお父さんがポツリと言った言葉を、私は忘れることができません。

「先生な、ユウキはワシの宝なんよ」
父子家庭で、家のほとんどのことは、同居するおばさんがやってくれていました。お母さんがいない理由までは聞けませんが、もしそこに部落差別があつたとすれば…

ユウキは全校生徒、保護者、来賓すべての人を前に、臆することなく堂々と、自分を大切に慈しむ育ててくれたお父さんとおばさんに、精一杯の感謝の気持ちを伝えたのです。（次回「スタートはマイナスから」）